

十二位の中の十地・等覺の階位説の相違と、その歴史の変遷を良く学ばれたことから、このような凡夫位から聖者位(等覺・妙覺)への修行(坐禪)という段階的に進む修証觀に疑問を持ち問題提起されたものであろう。

三 この問題提起を基本として、日本での参学に満足できず入宋求法され、あらゆる仏教宗派の長老について遍参され坐禪書を読まれたが、それらは還源返本・息慮凝寂という修証各別の段階的な修証觀であった。ついに本師・如淨禪師との邂逅から、正伝の坐禪(修証觀)とは段階的に進む修証觀ではなく修証一等・証上の修・不染汚の修証・只管打坐等の修証觀であると敷衍されるにいたった。これは釈尊が修道階位をまとめて説かれることがあまりなかったことを重視し敷衍化したという意味であろう。

四 中国禪宗の坐禪書を「ただ還源返本の様子なり、いたづらに息慮凝寂の経営なり」と批判し、天台教学の修道階位説の要語を使用して「観練薰修の階級におよばず、十地・等覺の見解におよばず」としている。唯一『宏智禪師坐禪箴』のみを道得是とされて、御自身も同様な「坐禪箴」巻を撰述されている。

### 道元の密受心印について

石井 修道

日本の初期禪宗の定着に大きな役割を果たした栄西(一一四一—一二一五)にしても、東福円爾(一二〇二—一二八六)にしても、従来、密教との関連が密接であることは指摘されていたが、最近、その結び付きはより一層強力であることが明らか

にされつつある。今回、道元(一二〇〇—一二五三)の重要な用語である「密受心印」の語について、密教と何らかの関係があるのでは、との質問を受け、『景德伝燈録』の「密」の使用例をすべて検討した結果、密教とは全く関係がない禪語であることが明確となった。この語、より厳密に言えば「密受心印よりこのかたの坐禪」の語をめぐって問題にするならば、極めて難解な問題が潜んでいるので、筆者の現段階での考えを述べようとするものである。

周知のように、道元の修証觀の特色は、「本証妙修」とか、「証上の修」と呼ばれている。その主張が見られる箇所は道元の『弁道話』であるとされてきた。その根拠として道元が引用したのは、『天聖伝燈録』巻八の六祖慧能と南嶽懷讓との「南嶽説似一物」の問答と、『景德伝燈録』巻五の六祖慧能の法嗣の司空本浄(六六七—七六一)の語である。この問題について、筆者は「なぜ道元禪は中国で生まれなかったか」(『道元禪師 正法眼蔵行持に学ぶ』所収、禅文化研究所、二〇〇七年)を踏まえて、「中国初期禪宗の無修無作説と道元の本証妙修説」(『東洋の思想と宗教』第二九号、二〇一二年)で新たな問題提起を試み、唐代禪の主張は道元とは異なり、元来、無事禪であることを明らかにした。

今回問題とする「密受心印」の語は、『弁道話』に後れることと四年程して真字『正法眼蔵』第八則の「南嶽磨磚作鏡」(「南嶽磨磚打車」とも)の話で取り上げられ、仮字『正法眼蔵』の撰述の準備が始まったのである。そのテキストの性格は『景德伝燈録』巻六「馬祖道一章」と巻五「南嶽懷讓章」を合糅した

新たに創作された磨博作鏡の話である。もともとの中国のテキストでは、馬祖の坐禅が「習禅定」であり、「道一聞示誨、如飲醍醐」を経て、「密受心印」とすると伝えるが、その説こそ道元の最も嫌悪したものであった。それ故に道元の「南嶽磨博作鏡」の話の馬祖の坐禅は「密受心印」後の坐禅でなければならなかった。

そのことは、この話を取り上げる『正法眼蔵』の『古鏡』『坐禅箴』『行持』において一貫し、『坐禅箴』では、「江西大寂禅師、ちなみに南嶽大慧禅師に参学するに、密受心印よりこのかた、つねに坐禅す」とあり、『行持』では、「江西馬祖の坐禅することは二十年なり。これ南嶽の密印を稟受するなり。伝法済人のとき、坐禅をさしおくと道取せず。参学のはじめていたるには、かならず心印を密受せしむ」などと示していることがなよりの証拠となろう。道元の「本証妙修」説と関連して言うならば、「本証」がここでは「密受心印よりこのかた」であり、「妙修」が「作仏を求めない坐禅」であると言い換えてもよいであろう。『正法眼蔵』の馬祖の坐禅は、本証妙修を内容とするものであった。

ここで「密受心印」とはどの時点をいうのかの難問題が生まれる。基本的には、道元を語る場合、「転迷開悟」の時点を探ることはその宗風よりなじめないというのが筆者の立場である。不明だった『行持』の六祖慧能の条も「得法已後、なほ石臼をおひありきて、米をつくこと八年なり。出世度人説法するにも、この石臼をさしおかず、奇世の行持なり」とは、「密受心印よりこのかた」の「坐禅」こそ、石臼が示すものではなか

ったか。その「石臼」は、同じ『行持』において、磨博作鏡の話の「博」に通じ、「伝法済人のとき、坐禅をさしおくと道取せず。参学のはじめていたるには、かならず心印を密受せしむ」と解することができるのではなからうか。

#### 癡兀大慧の禅密思想

高柳さつき

日本の禅宗は鎌倉時代初頭の栄西、中頃の道元により広められたという定説は、一九七〇年代の黒田俊雄の顕密体制論により崩れ、近年では、円爾(弁円)を中心とした聖一派の兼修禅(諸宗兼修ともいう。他教・宗を伴う禅宗。主に密教と結びつく)がその中心的存在であったことが認識されつつある。

癡兀大慧(仏通禅師)は円爾の弟子にあたり、円爾の兼修禅の継承者といえる。

真福寺(大須観音、愛知県名古屋市)の聖教調査により発見された大慧の『東寺印信等口決』と『十牛図』の註釈である大慧の『十牛訣』において、それぞれ大慧が禅と密教を中心とした諸宗関係をどのように語っているかを比較すると以下のことが言える。

・『十牛訣』は成立年不明のため(『東寺印信等口決』は、一九六六年の大慧の講義録を書写したもの)、時系列で考えることはできず、大慧の思想の変遷という観点からは捉えられない。大慧の仮名法語である『枯木集』(一一八三年)では、「俱舎等の三は、浅きか中にも浅し。浄土・法相・三論の三は、浅きが中に深き也。華嚴、法華は、深きが中に浅き也。真言、禅宗